



高名なお坊さん(その4)

文覚上人

源頼朝の挙兵を促したとされる文覚上人。

治承4年(1180)、以仁王が討たれたのが5月23日、三井寺が焼き払われたのが同じ月の27日。

以仁王の乱に三井寺と南都が協力し決起したことに驚いた平清盛は、寺院勢力との武力衝突を避けるため、翌6月2日、取り急ぎ、都を平家の拠点のひとつである福原(現兵庫県神戸市兵庫区)へ遷すことを強行しました。

平清盛は三歳の自分の孫である安徳天皇とその生母・建礼門院のみならず、後白河法皇、高倉上皇までも新都に移し、平家打倒の動きを封じ込めようとしていました。



文覚上人画像(神護寺蔵)

遷都され三ヶ月が過ぎた福原に、伊豆の国の流人・源頼朝が舅の北条時政とともに挙兵したとの報告が東国から伝えられました。

源頼朝は平治の乱の首謀者・義朝の嫡子。本来なら、父義朝と同様に死罪になっていた人物です。死罪にするところを、清盛の継母・池禅尼が早世した息子の家隆と頼朝が似ているからと執拗に助命を嘆願し、それに負けた清盛が刑を減じて流罪としたのです。

「命を救われた恩を忘れたか」と清盛の怒りは凄まじく、頼朝勢を討伐するために孫の維盛(重盛の嫡男)を大將軍、薩摩守忠度(清盛の弟)を副將軍にして、三万余騎の軍勢を福原から出陣させました。



文覚上人屋敷跡

住職レター

三月の半ば、今までの寒さから打って変わった急にあかくなり、春を感じられるようになりました。この様子だと、桜がいつもより早く咲くかなと思っていました。しかし月末を迎え、寒の戻りの如く、朝晩の冷え込みが厳しくなり、日中も肌寒く感じられました。まさに三寒四温。桜満開の春の前に、冬將軍の最後の悪あがきなのでしよう。

コロナ禍以前でしたら、この時期は歓送迎会が行われ、お花見気分が毎日が高揚しておりました。しかし、新規感染者が高止まりしたままの、このコロナ禍。加えての、ロシアによるウクライナ侵襲。戦禍の報がテレビニュースで放映される度に、心が痛くなります。なんとかならないのか、何かしてあげられないか、そう思っても、何も出来ない無力な自分に気付きます。せめて早く終結させられないものか。

改めて、暖かい部屋で、お腹いっぱいにご飯が食べることが、当たり前ではなく、有り難いことに気付かせて貰いました。

桜満開の頃には、戦争が終わって、安穩がおとずれますように、祈り続けます。



善教寺境内地にあった唯一の桜(約十年前に枯れてしまいました)